



市章

広報 えびな

発行・海老名市役所・海老名市国分155/編集・秘書広報課/電話・31-2111 (代) /〒243-04

世帯と人口	
昭和60年8月1日現在	
世帯	29,035世帯 (+90)
人口	92,894人 (+228)
男	47,786人
女	45,108人

毎月1日・15日発行



命すてまますか



道路交通法の一部が改正され九月一日から、すべての道路で運転者はシートベルトを着用しないと自動車運転できません。交通事故の死者の半数以上はシートベルトを着用すれば助かったといわれています。シートベルトは「命の綱」なのです

シートベルトは命綱

着用していれば助かったかも?

東名高速道路で大型トラックと乗用車が接触しました。車の速度は推定百。接触と同時に乗用車はスピン(回転)しました。この乗用車の運転者はシートベルトをしていませんでした。この

シートベルトを着用していなかったために運転者は車外に放り出され重傷を負った

ため、運転者はブーンによる遠心力によって車外に放り出され路面に頭部を強打し重傷を負いました。この事故が掲載の写真です。神奈川県警察高速道路交通警察隊で事故の処理に当たりましたが、「シートベルトさえしていれば、こんな重傷を負わずにすんだはず。事故にあった運転者は脳障害の後遺症が残つて聞いています。百のスピードの事故は、十、四、五階の建物から落ちた衝撃と同じなのです。このことを考えたら、シートベルトなどは運転できかないはず」と交通警察隊は語っています。

シートベルトの正しいつけ方



疲れも減って 気持ちも安定

シートベルトの着用は、体が固定され、運転しやすく疲労も多くなると考えられている人はいないでしょう。日本大学生産工学部で実験した結果、着用したときとしないときでは、疲労度は着用によって二〇%近く軽減されることがわかりました。その理由は、腰や上半身が安定するため、よけいな動作を防止し、注意力を集中できるからです。また、精神的な効果も見がせ

なぜ? なぜ着用しないの

近くにいくだけだから

シートベルトを着用していない人に、理由を聞くと次のようになります。しかし、そのいずれもが誤った考えによるものです。

- 安全運転をしているから不要 安全運転をしていても、いつ無謀運転の車から衝突されるかわかりません。事故の半数は「もらい事故」で、死傷率も高いです。
- 一般道路では不用 死亡事故の九・二%は一般道路で発生しています。交通事故の危険性は、高速自動車道路でも一般道路でも変わりません。

シートベルトを着用していない理由を聞くと次のようになります。しかし、そのいずれもが誤った考えによるものです。

- 車外に投げ出された方が助かる 交通事故にも車外放り出は、車内に留まる場合に比べて、死したり重傷を負ったりする危険性は高くなります。
- 車の火災や水中に転落したとき脱出できない、シートベルトを着用していないと、衝突などで気を失ったり、傷害などでかえって車外に脱出する機会を失う場合の方が多いのです。
- 速度を出していなければ両手両足でつづければいいから

丈夫 人間が両手両足で支えられる力は、体重の二、三倍です。おおよそ時速七十未満の衝突ならば、シートベルトなしでも耐えられますが、それ以上は無理です。

時速二十の衝突でさえ、その衝撃は約三百にもなり両手両足だけでは耐えられるものではありません。

●近くに行くだけなので不要・事故は運転し始めて十分以内にも最も多く発生しており、全事故の三・三九%を占めています。二十分以内となると全事故の約半分にになります。

クイズ番組が大好き

市内最高齢(97歳)の
二見 ちよさん



「食事をおいしく食べる」と二見さん

「医者にかかったのは七十歳で、風邪をひいたときから一回だけ。私の内はみんな長寿なんです。私の母は、市内最高齢の二見三三さん(97歳)の友人で、お母さん(97歳)の子供を産みました。」

「やせてはいますが、しつぱだけは嫌いではありません。自分も減らしてつけられたので、近頃では、足踏まて自分で作ってまいりました。自分(二見さん)は、お母さん(三三さん)の友直さん(97歳)の友人で、お母さん(三三さん)の子供を産みました。」

「食事をおいしく食べる」と二見さん

「食事をおいしく食べる」と二見さん

「食事をおいしく食べる」と二見さん

「食事をおいしく食べる」と二見さん

「食事をおいしく食べる」と二見さん

加藤さんが申し出 みんなが協力



「安心して遊べる」

「安心して遊べる」

「安心して遊べる」

「安心して遊べる」

「安心して遊べる」

「安心して遊べる」

「上今泉3丁目広場」が完成



「安心して遊べる」

「安心して遊べる」

「安心して遊べる」

「安心して遊べる」

「安心して遊べる」

「安心して遊べる」

愛子園で生きた教材に



「安心して遊べる」

「安心して遊べる」

「安心して遊べる」

「安心して遊べる」

「安心して遊べる」

「安心して遊べる」

市長随想



「安心して遊べる」

「安心して遊べる」

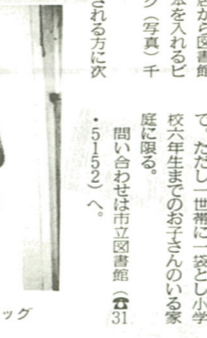
「安心して遊べる」

「安心して遊べる」

「安心して遊べる」

「安心して遊べる」

国民健康保険 徴収を更新



「安心して遊べる」

「安心して遊べる」

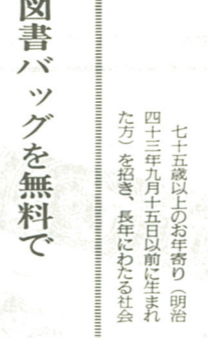
「安心して遊べる」

「安心して遊べる」

「安心して遊べる」

「安心して遊べる」

黄色い図書バッグを無料で



「安心して遊べる」

「安心して遊べる」

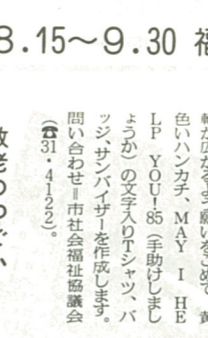
「安心して遊べる」

「安心して遊べる」

「安心して遊べる」

「安心して遊べる」

今泉中に夜間照明施設



「安心して遊べる」

「安心して遊べる」

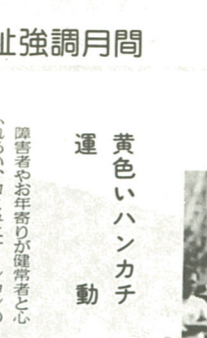
「安心して遊べる」

「安心して遊べる」

「安心して遊べる」

「安心して遊べる」

二市合同身体障害者運動会



「安心して遊べる」

「安心して遊べる」

「安心して遊べる」

「安心して遊べる」

「安心して遊べる」

「安心して遊べる」

愛護作品展



「安心して遊べる」

「安心して遊べる」

「安心して遊べる」

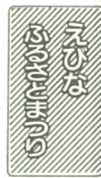
「安心して遊べる」

「安心して遊べる」

「安心して遊べる」

世代を超えて祭りの輪

ふるさとまつり 市青年の祭典に2万6千人



「ふるさと」を実感

断続的な雨の中で行われた各種催し物は、やはり子供たちが一番楽しんでたようでした。ミニS Lコーナーでは順番待つ長い列ができ、何度も同じミニS Lに乗って大興奮する子供たちに、お供をする親ごさんが首を上げるほどでした。また、今年初の試みでホテルの無料プレゼントも行われました。



青春に陶酔

空をおおう雨雲を恨めしく思いながら、海老名中央公園に足を向けてきました。ロックコンサートへ行くと、何年ぶりかという「子供たちの前では自称二十歳の私ですが、はたして真正正銘の若人を前に「その場の雰囲気」に無理なく溶け込める



神秘的なインド舞踊も登場

五匹子に入った中かきを描いて、百人の方に差し上げるこのコーナーでも子供たちの長い列が……。初めてホテルを見るおまじんは、闇(やみ)の中に動く光を不思議な感動を覚えたでしょうか。そして、すっかりおなじみにな

つたはやし理も祭りの主役のひとつです。はやし理も男の子も女の子も一緒にたたく太鼓の音に、それぞれの「おまじん」を体で感じたとこでしよう。



仮装行列も初参加写真は七福神

日も暮れた午後七時、いよいよ太鼓踊りが始まりました。赤の裾(すそ)上げ、黄色のたすき、そろいのゆかた



ミスボランティア五人が誕生

観客は予想通り女子高校生、大学生が大半を占め、時折子供連れの若夫婦、熟年の夫婦など、ステージの若者も比べ、観客は少々行儀が良くなるようにも思いましたが、それなりに音楽に陶酔した様子でした。



かしろと少々心配した。会場に着くや、はしけるようなロックミュージック、七十年代の青春時代そのまま、若いエネルギーをからだ全体から放出しているようでした。



祭りに次がせめはやし連



ミニS Lに子供の人気が集中

が美しく、みんな踊る待ちかねていましたが、二、三曲踊ったころに大粒の雨が降り、テントに避難する始末です。すぶぬれになつて、明日の衣裳が心配されましたが、結局、十一日の夕までまつりは朝から降った大雨で中止になりました。

そのため、残念ながらもじや二百五十発の花火を見ることができませんでしたが、来年は心のあるさと、祭りを十分味わいたいと期待しています。(市広報モニター 鈴木悦子 さつき町)

来年の「青年の祭典」では、観客と主催者団体との、より一層の一体感を期待しています。(市広報モニター 板野佐登子 社)



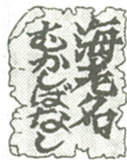
豪雨の中は白熱のライブ!

今年もまた大正十二年九月一日の震災の日がやってきた。旧海老名地区で最も甚大な被害を受けたのは中野田だが、それに次ぐのは河原口であった。河原口は八字でいうと北は総持院(そうじいん)のある坊中(ほうちゆう)から、順次南へ宿(しゆく)・上長尺(ながさか)そして安養院のある下長尺(げさか)に一般には名目上「なごさわ」と呼ぶ、と相模川添いに発達した集落で、当時戸数は百二十四戸であった。そのうち九十九戸全壊、二十八戸半壊、計百十九戸で住宅で助かったのは北方の田口・古川両家の外三戸のみで被害率

当時の相模橋は今のものより概から約十五ほど北へかかっていった。全長二百四十六・六、幅四・五、大正二年に開通式を挙げた県営の橋であった。中央は三連のいわゆる釣橋であったが、両端部は木橋になっていた。厚木側の木橋部は大なるみでどうやら壊れたが、河原口側は墜落してしまつた。東端の一部の橋脚三・六ほどは道路に上り出しはね上がり、見ても無惨な光景を呈した。

より時の井上門太郎村長が表影を頂かれたのであつた。氏の孫、愛吉氏は当時十九歳の青年で、その日の夕方、海老名村青年団河原口支部と印した細(ほそ)のちようちんをつけて、本多という青年二人で橋の警戒に当たつてゐた。そこへ東京の朝日新聞の記者三名乗る車が現れた。聞けば大阪の本社へ帝都の惨状を報告に行くのだといひ、平塚へどう出たらいかがと聞いた。二人は例のはしこを上つて橋を通し、厚木の町はほぼ三分の二焼けて市内は通れないので、亀裂だらけの堤防をあつちこつちと飛び越えて旭町(小田急線が川を渡つて、左側あたり)までたどりつき、平塚への道を教えてやつたといふ。

第120話 関東大地震 と河原口



関東大地震後の相模橋 (宗住寺所蔵の写真)

相模橋はその後河原口青年団が渡辺製材所から電柱をもらい受け、橋のあかた(かみ)除けになっていた杭(くい)を基礎にして橋脚を立て、釣橋への字型に接続して一応強れるようにされた。翌年工兵大隊がその南側に仮の木橋を架設、翌十四年墜落個所の復旧がようやくでき、金銭節約橋式になったのは、大正十五年七月であった。(国分の池田武治氏寄稿)

九六分という凄絶的打撃を受けた。これに三名の圧死者、一名の重傷者の人的被害も加わつた。その又は養蚕の盛んな時代ではほとんどの農家で蚕を飼つていた。温度と湿度の調節のため、火を用いた名古沢の二軒の家が煙が出始めたが、近所の人たちがなげ、かまのよなもまで持ち出して前の小川から水をすくって掛け、必死で初期消火に努めて大事に至らなかつたのは不幸中の幸いであつた。県央の東西交通の大動脈であつた相模橋もその機能を失つた。

様子を見て、自宅の三間(さんま)と隣家から借りた二間(にま)はしこを、路上に架け下がついてる電線を用いて懸架合わせ、河原口から約橋へ一人ずつではあるが上り下りできるとつて応急処置をとりられた。同氏はまた馬力運送業もしていた関係上、名古沢稲荷講中十八戸の米を相模橋市磯部の水車屋まで運搬し精米してあげられ、人力による苦しい米つき作業からの解放を許された。こつした災害時の犠牲的実業に

海老名
むかしむかし
☎33・3838
海老名の昔ばなしが
電話で聞けます。